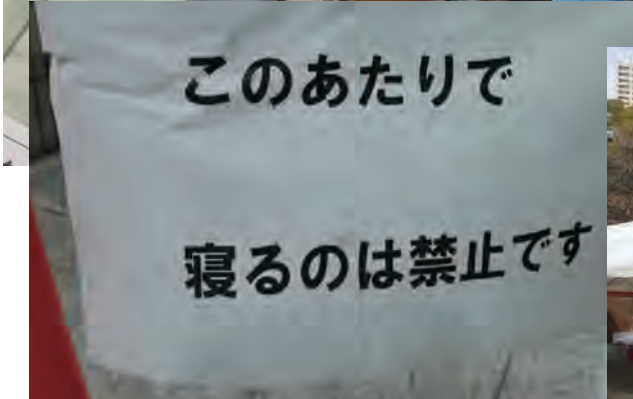


# 神戸 YWCA 夜回り準備会（仮） 活動報告書 vol.16



## 今号の目次

1. 「意地悪な街」 写真紹介
2. 夜回り活動報告
3. 「更生センター」 訪問記
4. 神戸ソーシャルブリッジ
5. 灘中高生訪問感想
6. 参加者の声
7. 会計報告・寄付寄贈報告

## 襲撃と排除

### 一意地悪な街 写真紹介 — 野々村 耀

若い頃に、「ワニのそらなみだ」という言葉を聞いたことがあります。ワニが人間を喰いながら、「かわいそうに」といって涙を流す、という皮肉です。（これは人間の話で現実のワニとは関係ありません）私たちは、主観的には同情したつもりで実は傷つけているのではないか？というのがこの原稿の趣旨です。

岐阜市で2020年3月25日81歳の男性が石を投げつけられて殺されました。それまでに橋の下のテントで同居していた女性とともに数回警察に相談したが、聞いてもらえず「帰って、帰って」とあしらわれ、3月25日に5人の学生に襲われ、殺されました。

11月5日東京・上野公園で公園に暮らす男性の荷物が放火され燃えてしまった。管理する公園

の事務所には路上の荷物に関する苦情の電話が少なくないとのこと。

11月16日、東京・渋谷区内のバス停で寝ていた大林三佐子さんが頭を殴られて死亡しました。5日後に逮捕された男性は「あそこから退いてほしいと思っていた」「痛い思いをすれば退くと思った」といっているとのこと。この男性は、掃除のボランティアをしてたそうです。

8月～9月、横浜市・関内駅周辺で、寝ている男性に少年グループが暴行を繰り返していました。関内周辺は1983年に中学生らの少年グループが路上で暮らす人十数人を殺傷した事件の発生場所だったから、横浜市の教育界には衝撃でした。（83年の事件が筆者が野宿する人と関する原点でした。私は、自分が殺す側にいると気付かされました。）



布引停留所バス停ベンチ奥行きが狭い。渋谷で殺された女性が寝ていたのと近いサイズ





こういう襲撃は、枚挙にいとまがありません。神戸でも繰り返し起こっています。石を投げつける、花火の水平打ち、エアガンで撃つ、生卵をぶつける、自転車や鉄骨を投げつける、寝ているテントに放火する。毛布や生活用具を川に投げ込む。そこから出て行けと迫ったり、市や警察に訴える。襲撃や排除をする人は、良くないことをしたとは思っていません。むしろいいことをしたと思っています。町を安全にする、きれいにする、と。

意地悪な写真を、このページで少し紹介しますが、野宿する人が寝られないようなベンチを作るのは、公園を管理している行政です。雨露をしのげる場所に入れないように金網を張るのも、道路を管理している国や、県や市です。そして、市民は何とも思わない。自分の属している町が、ベンチや金網によって<野宿する人を排除する>と

いているわけです。黙っていたら、私も、排除に加担しているわけです。

日本の解放運動の一つの始まりだった「水平社宣言」に「・・・兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によつてなされた吾らの爲めの運動が、なんらの有難い効果をもたらさなかつた・・・そしてこれ等の人間を勤る（いたわる）かの如き運動は、かへつて多くの兄弟を墮落させ・・・」という一節があります。このいたわると読まれる文字は、実は、殺すという文字です。



変なベンチ年寄りには座れない。増して寝られない。





# コロナ禍の一年を振り返って

## 一夜回り活動報告

梅澤 昌子



### 復興と不可視化

わたしたち神戸YWCA 夜回り準備会の活動は、26年前の阪神淡路大震災の後の救援活動から始まりました。その当時からずっと「野宿したくない人が野宿しなくてすむように。野宿せざるを得ない人の人権が損なわれないように」を共通の考えとし、野宿されている方をサポートする活動を続けてきました。

四半世紀を超える年月の間に街は復興し、野宿されている方も震災後の2-3年目をピークに減り続け、ここ数年は神戸市内で野宿されている方の数は50人を下回ると報告されています。一方で、神戸市内に立ち並ぶネットカフェやコンビニ、イトインで夜を過ごしているいわゆる「ネットカフェ難民」の実数や実態については調査もなく、わたしたちも貧困や住居不安定者の問題が目に見えない形で広がっていることを意識しつつも、具体的な支援活動には繋がられないままでした。

新型コロナウイルス感染拡大とそれに伴う景気と雇用の悪化は、そのような不可視化されていた問題を一気に明るみにし、さらに社会の変化に対応しきれていない行政や市民団体側の課題をも浮き彫りにしたと言えます。



### コロナ禍の1年

わたしたちにとって、コロナ禍による最初の「可視化」は2020年3月の更生援護相談所（神戸市営の無料宿泊所）の閉鎖告知でした。相談所が閉鎖されると、30名~40名ほどの利用者が寝場所を失い、野宿を余儀なくされます。結局のところ閉鎖は寸前で回避されましたが、この騒ぎにより、夜回りメンバー間の危機感と意識は高まり、活動は活発化しました。

2020年度前半（2020年4月~9月）は、感染予防のためのルールを作り、夜回り・昼まわりを続けました。ネットカフェに寝泊まりされていた方の居宅確保を支援し、生活保護申請に同行。メンバーの勉強会として更生援護相談所を訪問。Zoomを導入し、少なくとも1-2ヶ月に一回はミーティングが開ける体制を整えました。10万円のコロナ特別定額給付金については、今いる場所で給付金を受けられるよう、神戸市に要望を提出しました。

後半（10月~2021年3月）は、他団体との協働や若い世代の夜回りへの関わりなど、活動に広がりが生まれました。神戸ソーシャルブリッジのプロボノメンバーと共に活動の今後について考え、灘中・灘高の生徒さんたちがわたしたちが拠点とする神戸YWCA分室を訪ねてこられまし





た。神戸「冬の家」(越年越冬活動)の担当日には10代や20代のボランティアが主力となって働いてくれました。

また、通年で、月2回の夜回りを1度も休むことなく実施。昼まわりも隣接する芦屋市までエリアを広げ、昼間にしか会えない人やゆっくり話をしたい人のもとを訪ねました。外部セミナーや研修会に積極的に参加し、全国的な署名活動への協力も随時行いました。

今年1月には、神戸YWCA分室が将来使えなくなった後も活動を継続すると決定。自動車の確保(タイムズカーシェアの利用検討)や新拠点探しなどの準備をスタートさせました。神戸新聞に寄付寄贈の呼びかけが掲載されたこともあり、たくさんの市民の方がマスクを送ってくださり、ご寄付も例年より多くいただきました。その反面、つい最近も、わたしたちがつながっている方の居場所に行政の貼り紙が施されました。その後、その方に会えなくなり、わたしたちはこの貼り紙が原因なのではないかと考えます。応援してくださる人はたくさんいるけれども、残念ながら、偏見を持ち排除しようとする人も少なからずいるというのが実感です。



### 生活に困る人々の増加

昨年4月、緊急事態宣言発令に伴うネットカフェ休業要請により、寝場所を失った人への公営住宅の提供が、兵庫県と神戸市でそれぞれ、実施されました。県と市の担当者に、どんな方が利用されたか問い合わせたところ、共通して「20代～70代で、一番多いのは30代～40代」「男性が多いが、女性も一定数いる」との回答を得ました。「収入がなくなって家賃を払えなくなり、ネットカフェで寝泊まりしていた」「コロナ禍で失業し、会社の寮を出ないといけなくなった」(神戸市)、「親子4人家族で車中ホームレス、子供たちは学校に通っていなかった」(兵庫県)などのケースもあったそうです。

また、コロナ特例の「緊急小口資金」貸付(最大20万円)は、兵庫県では昨年12月末で4万7千件(うち約半数が神戸市)、総額83億円に達し、阪神淡路大震災の後の同様の小口貸付(最大20万円、5万4千件、約77億円)を総額では上回りました。「総合支援資金」(最大月20万円を3ヶ月)は、兵庫県ではリーマンショックの2009年に比べて、件数は5倍(うち約半数が神戸市)、総額は10倍に膨らんでいます。

新たな拠点探しや、ボランティアの確保など、活動の継続は決してたやすいことではありませんが、居住に困る人や生活に困窮する人が増えている中、やめるわけにはいかない、というのがわたしたちの思いです。26年の歩みを次の世代に伝え、地域で野宿されている方々に寄り添い、貧困や格差の問題を訴える活動を今後も続けます。

# — 活 動 概 要 —

## 野宿をされている方に寄り添って

**夜回り：**第二、第四土曜日の夜、神戸市灘区を中心に、野宿をされている方々のもとを訪問。お湯とドリップコーヒーをお持ちし、その場で淹れたコーヒーを飲んでいただきながら、お話をうかがいます。ボランティアが作るおにぎり、またはパンに加えて、寄贈品、マスクなどの衛生用品、蚊取り線香やカイロ、毛布、寝袋、衣服などを必要に応じてお届け。定例以外の日でも、寒さが厳しい夜には居場所を訪ね、安否を確認し、寝袋などをお渡ししました。

- 頻度：定例で月2回、および臨時で年間数回
- 1回あたり訪問人数：3～5人
- エリア：神戸市中央区東部、灘区、東灘区、芦屋市

**昼まわり：**夜回り同様、食料などを定期的にお届けして状況をお伺いする方もいれば、緊急の相談対応が中心となった方もいました。YWCAに「今晚泊まる場所がない。更生援護相談所に泊まれるのは男性だけだと区役所で言われた」と、女性からSOSの電話があり、メンバーが相談にのったケースもありました。

- 頻度：不定期。必要に応じて。
- 居宅確保（成約）1件
- 区役所同行：2人、計3回
- 福祉・居宅相談：3人
- エリア：夜回りと同じ

**神戸「冬の家」(越年活動)：**コロナ感染拡大予防のため、調理は行わず食料配布のみとなりましたが、今年度も恒例の越年越冬活動を行いました。

- 担当日：2020年12月27日 追悼行事日
- 当事者数：109人
- ボランティア数：17名（神戸YWCA職員を含む）
- 配ったもの：おにぎり、カップ麺、りんご、グラノーラバー、おせち（れんこん、なますなど）一品、ポッキー試供品、マスク、カレンダー

## 行政へのはたらきかけ

**更生援護相談所閉鎖騒動：**神戸市に情報公開を請求しました。

**コロナ特別定額給付金：**「わたしから神戸市への提案」

にて、神戸市長へ「今いる場所で給付金を受けとれるようにしてください」と要望を提出しました。

**ネットカフェ利用者への公営住宅の提供：**神戸市および兵庫県の利用状況データを収集しました。

**野宿している人へのコロナワクチン接種：**神戸市へ問い合わせし、「更生援護相談所で接種を受けられるよう検討中」という回答を得ました。今後も進捗を確認します。

## やさしい社会をつくるために

**排除アート：**神戸市中央区～灘区を中心に「座りにくいベンチ」などの写真を集めました。

**情報カード(チラシ)：**困っている人を見かけときに渡せるように、炊き出しなどの情報をまとめたチラシ（あるいは情報カード）づくりに着手しました。

**神戸新聞：**マスクの入手が難しかった2020年春、マスクの寄贈と寄付の呼びかけを掲載していただきました。新聞を読んだ方からたくさんのマスクをお寄せいただき、励ましのお便りも届きました。

**灘中高生の訪問：**震災の頃から活動しているメンバーが経験を語り、共に格差や排除の問題について考えました。

**ソーシャルブリッジとの協働：**10月から12月にかけて、プロボノメンバーのみなさんとミーティングを重ね、今後の活動のあり方を模索しました。2021年2月のソーシャルブリッジフォーラム(参加者100名超)に夜回りメンバーが登壇、活動を紹介しました。

**勉強会：**メンバーの勉強会として、更生援護相談所と更生センターを訪問しました。

**署名協力など：**

- ホームレスで住民票のない人にも特別定額給付金を求める署名(2020年7月)
- 殺害されたホームレス女性を追悼し、暴力と排除に抗議するデモ(2020年12月)
- 生活保護利用の阻害要因である「扶養照会をやめてください！」(2020年1月)
- 大阪地裁：生活保護基準切り下げ違憲訴訟判決につき厚労大臣へ控訴しないよう呼びかけ依頼(FAX:2020年2月)

# 「更生センター」訪問記

寺嶋 英介

2020年7月、神戸市灘区にある「更生センター」を見学しました。生活保護を受けられている男性に寝床と作業訓練を与える神戸市の施設です。生活保護に関係なく、生活に困った方へ向けた無料一時宿泊施設の「更生援護相談所」も入居しています。当日は村山所長からお話をいただくとともに、内部を案内していただきました。こちらは合計7名での訪問でした。

訪問時に説明を受けた点などの記録は別途提出しました\*。ここではそれを踏まえた簡単な感想を書かせていただきます。

家を失うなどで野宿を強いられる人に対して一時的な救援策として、このような施設が用意されていることは肯定的に受け止めるべきだと考えました。

見学当日、御説明くださった市職員の所長さんも誠実に職務にあたっておられるとの印象でした。

気になったのは、設置からかなり時間が経っており、清掃は行き届いているものの大部屋方式、2段ベッドなど、そのフォーマットとしてそろそろ見直しが必要かもしれません。所長さんの「刑務所と同様にあまり安楽な施設とするわけにはいかない」とのお話は悩ましいものでした。

すぐにワンルームマンション的なものを望むとまでは言わないにしても、ネットカフェは基本的に個室です。若者はネットカフェの利用が多く、潜在的なホームレスになっているとの見方もあります。

若い世代での利用も意識した工夫も含めて、このような施設の収容力やそのフォーマットについて、再検討が必要ではないかと思いました。

また、こちらは男性を受け入れ、女性については県立の施設に誘導していることですが、そちらの受け入れ体制については今回は確認出来ませんでした。コロナ禍にあって、女性の自殺者が急増しているとの報道にも接しました。従来、女性の野宿者は少なかったとされますが状況が変わって

いるようにも思いますので、神戸市としてどう考えるか、確認したいところです。

新長田の震災後の再開発に関する事業評価が最近出されました。当初の想定通りには人が戻っていないとされますが、ずいぶん時間が経ってからの評価となっており、もっと早く検証すべきであったと報告されていることが印象的です。

行政の施策は概して状況の変化からする見直しが遅れ気味です。世の中のニーズに合わなくなったことを「しっかりと真面目に」やっていることにならないよう、「夜回り」のグループのように現場をよく見ておられるところからの意見は大事ではないでしょうか。



\*「更生センター」の詳しい情報は夜回り準備会のブログをご覧ください→



<https://yomawari.hatenadiary.org/entry/2020/09/27/080000>





# 神戸ソーシャルブリッジ

## —協働プロジェクト報告—

南部 直樹



夜回り準備会が活動を始めてから今年で26年となり、生活困窮を取り巻く環境は発足当時から大きく変わり、従来の活動では対応しきれない課題が目立つようになりました。また、仕事や家庭の事情によってメンバー全員が集まって議論することが難しい中で、夜回り活動が大事にしてきた理念を認識したり、メンバーが持つ夜回り活動への思いを共有することができていませんでした。

そこで昨年10月から12月にかけて、夜回り準備会は神戸ソーシャルブリッジと協働し、「ブリッジプロジェクト これからの活動・広報戦略のための活動理念の整理・言語化にチャレンジ!」を行いました。神戸ソーシャルブリッジとは、神戸市の委託を受けてNPO法人しゃらくと認定NPO法人サービスグラントが実施するプロボノ活動のことで、神戸市内のさまざまなボランティア団体に期間限定で参加し、団体が抱えている課題の解決に取り組んでおられます。このプロジェクトでは、5人のプロボノの方とともにメンバーそれぞれが持つ夜回り活動への思いを整理し、活動の世代継承や発展の方向性を考えました。メンバーへの個別ヒアリングやブレインストーミングを通して、それぞれのメンバーが持つ思いと、現在の夜回り活動の課題を外部の視点で言語化していただきました。

プロジェクトを終えて、3人のプロボノの方からコメントをいただきました。



### プロボノ活動で夜回りの皆様 とご一緒に

夜回り準備会の皆さんとは神戸ソーシャルブリッジというプロボノ活動で一緒しました。プロボノとは、個人の業務経験を生かしてチームで社会貢献を行う団体を支援するボランティア活動です。

我々5名のチームで野々村さんをはじめ皆さんのお話を聞き、夜回りにも同行しました。私も初めての同行では、野宿者の方々が、過去のやむを得ない事情で住居や生活を選択され、現在に至っていること。また、皆さんが25年の長きにわたり、寄り添い活動をされていることに感銘いたしました。

約2か月間でしたが、プロボノチームとして、夜回りの皆さんが、コロナ禍における変わりゆく貧困問題に対して、次に進み活動されようとしていることを感じ、ワークショップ等により、日頃の活動ではできなかった意見交換の場を創るお手伝いことができました。皆さまの熱い思いを感じつつ、楽しく活動ができたことを嬉しく思います。

(辰井俊二)



夜回り準備会に参加して考えさせられたことが二つあります。

一つは生活困窮の問題は誰しも日常に隣接している、いつ何時自分にも現実化する可能性があるという事。日々すれ違っているのに、余りにも関心を持たれていない現実に闇の深さを感じました。

二つ目は社会的課題解決の広報、意識喚起の手法にはまだまだやりようがあるのではないかという事。SNS や Web サイトは手段であって、それらを駆使することというより、誰に何をどう伝えると関心を持ってもらえるかの作戦を考えることが大切ではないかと感じました。価値のあることを継続するには価値を評価してもらう必要があると思います。夜回り準備会の活動の精神や社会における価値をもっと多くの人に知ってもらいたいと願います。

プロボノ活動で関わり、わずかばかりでもお手伝いできたことはとても貴重な経験になりました。大変有難うございました。(青木葉子)

今回の活動で、野々村さんはじめ活動されている方々の思いやその歴史的背景を伺い、実際に「夜回り」を体験したことで、一人の「無知」がおよぼす世間への影響の大きさを痛感しました。まず、自身の「無知」—それは、「仕事を失うことはある意味自己責任である」という考え方でした。日雇いなんでそもそも不安定な仕事を選ぶ時点で、いつでも失職するリスクがある。それを予期していなかったからじゃないのか? という浅いもの見方でした。しかし、私の経験値からの目線で

あって、その階層下にある歴史的背景や政治的視点がまったく加味されていないことすら気づかずに、あたかも「世間の常識」のような意識でいたこと。正直恥ずかしいと思いました。その後、私のような無意識に固定概念をもっている一人。たった一人が100人いたら1000人いたら、やがて目に見えない世間という大きな脅威の塊となる、と。この「無知」から「脅威」に変わっていく過程をどうやったら認知してもらえるのか、どうしたら伝わるのかと模索している時に「駅の子」というNHK制作のドキュメンタリーにたどりつきました。

昭和20年8月終戦を迎えた日本、親や家族を失い、家もなく、働くこともできない子供たちが12万人を超えていたにもかかわらず、公的施設の数も少なく、上野の地下道に子供であふれかえっていた事実。「だれのせいでもない」とわかっているはずなのに、人は、時とともに境遇の違いから差異へと変わり偏見という脅威へ変わっていく。

それを見た時にまさに「生活困窮者」の背景と同じで、時代は変われど、未だ解決していないままだと。歴史と現実、そこで何が起こっていたのかという真実を知ること、それを伝え続けることと同時に、自分自身の中にも「差異」という「一凶」があるという自覚をし、それとどう向き合うかという問いと行動を繰り返しながら生涯、修正を重ねていくことこそが私たち一人一人に課せられた課題だと確信しました。(青木宏将)



今回の協働プロジェクトに関する情報は神戸ソーシャルブリッジのWebサイトでもご覧いただけます→



[https://socialbridge.city.kobe.lg.jp/project/ksb20\\_yomawari](https://socialbridge.city.kobe.lg.jp/project/ksb20_yomawari)



## 灘中高生訪問感想



2020年11月5日、灘中学校・灘高等学校の生徒さんが神戸YWCA夜回り準備会を訪ねてくださいました。当日は代表の野々村を中心に、貧困や排除にまつわる様々な話題についてお話をしました。みなさん熱心で本当に感激です。今回の報告書ではいただいた感想文を掲載します。(南部直樹)

先日、YWCAさんを訪問し、お話を聞きました。僕は社会的に弱いとされる方との接点が今までほとんどなく、逆に昨今の社会保障制度の充実により、このような状況は殆ど無くなっているものだと考えていました。しかしそれは違いました。僕は、社会保障制度云々というより、このような実態と距離を置き、また学びの場で若者に伝えない、社会全体の雰囲気は何よりの問題だと考えます。昨今の就労状況、特にコロナ禍における現状を知るにあたり、自分の中にも、この問題への危機意識が芽生えました。これから、この問題を積極的に啓発していき、少しでも力になりたいです。(林慶一郎)

野宿者にどう向き合うべきか、という問いを心に秘めながら訪問したが、話を聞く内にそのような問いすら誤っているように感じてきた。彼らは「普通の人間」(このような言い方からおかしいのですが)と同様に、多種多様であり、ある一つの正しい向き合い方はないのだと気付いた。野宿したくない人に野宿をさせるべきではないが、野宿を否定するわけではないという言葉がずっと入ってきた。

しかし一ついうことができるとするなら、私たちは皆、当たり前のように、精一杯、豊かな人生を生きようと、一定の制限下における選択肢の中から何かを選び取って生きている。確かに、その一つ一つの選択は個人の意思によるものであるが、だからと言って責任を負わせていい訳ではない。この素朴な事実が、野宿者に限らず、他者と向き合う際に何より重要なことのような気がする。

本当にありがとうございました。(M)

比較的に裕福な家庭に生まれて、今まで生活に苦労することなく生きてきた僕が、ボランティアをしたり、様々なことを考えるようになるまでの経緯と今の率直な思いを述べようと思う。

僕は生活に困らないまま中学生まで生きてきて、社会問題について楽観視していた。しかし中学生になり、このような問題に対して関心がある先輩たちと関わり、もう一度このような社会問題をなくしていくためにどうすればよいのか考えて初めて酷い現実を知り、悩んだ。

そうして悩んでいると、ありがたくも神戸YWCAさんから話をうかがえる機会を頂いたという話を聞き、悩みに終止符を打つために参加させて頂いた。

お話では、現実には想像以上に酷いということを知った。野宿を余儀なくされている方は、理不尽な理由で家を失い、雨風をしのげる場所も自治体が柵などを設置して入れないようにしたり、拳銃の果てに襲撃され追放される。聞いていて本当に胸が痛くなった。しかし、YWCAの方の話を聞いて悩みは消えた。問題を完全に解消することは難しいという結論に納得できたからだ。そして、悩む暇があったら行動すべきだと初めて気づいた。そして、現状を知らない子供がたくさんいるという危機感を感じた。

そして僕は年末に越年越冬活動のボランティアに参加させて頂いた。このようなたくさんの体験を通して、僕は大きく成長できた。皆さんが一生懸命ボランティアをしたり広報活動をしている理由がほんの少し理解できた気がする。

改めて神戸YWCA夜回り準備会の皆さん、僕にこのような成長を与えてくれる場を用意していただいて本当にありがとうございました。(伊藤将太郎)



神戸YWCA夜回り準備会さんの活動は学校の先生から紹介され、関心を持ちました。関心のあ  
る生徒数名を集め、訪問してお話を伺えること  
になりました。

野々村さんのお話は、衝撃の連続でした。襲撃  
の問題、野宿者の居場所を無くしてしまう「排除  
アート」の問題は、これまで思ってもみなかった  
ような社会の不寛容さの表出で、強く印象に残っ  
ています。自分が思っていたよりも社会は厳しく  
不条理なのだと、痛感させられました。社会の中  
で自分は何をなすべきなのか、これからも考えて  
いこうと思います。

私たちを温かく迎えてくださった野々村さんを  
はじめ、神戸YWCAの皆さん、本当にありがと  
うございました。(S.H.)

先日、神戸YWCA分室を訪問させていただきました。  
路上生活者に関する問題には関心があっ  
たので、それについてある程度の知識は持って  
いました。しかし、人々の、また社会の路上生活者  
に対する接し方の不寛容さを聞いて驚きました。  
現在、社会で「自己責任」という言葉をよく聞く  
ようになっていきます。しかし、私たちが最も欲す  
るものは何でしょうか。「幸福」のはずです。「自  
己責任」「自己責任」と批判される社会に暮らし  
て私たちは幸福でしょうか。少なくとも僕はそう  
は思いません。「不寛容」をやめる。できるかぎ  
り他者に「寛容」である。そうすれば、他者を幸  
福に、さらには自分を幸福にする事ができると思  
います。(K.K.)



## 参加者の声



### 夜回り準備会に参加して

R.M.



参加したきっかけは、年末の越年越冬活動です。  
炊き出しをやっている事は数年前から知っていま  
したが、特に参加するきっかけはなく。

今年はコロナで遊びに行く機会が減り、時間を  
持て余して、調理なら人並みにお役に立てそ  
うだし、気負わずに出来そうだし、何より自分も  
食べられる！という理由でYWCAのHPよりコン  
タクトを取ってみました。

結局、越年越冬活動は食料品の配布になり、炊  
き出しの料理を食べる事は叶わずでしたが。

当日は食料品をさっと渡すだけ。当事者の方と  
ゆっくりお話する事も出来ないため、詳しいこ  
とはわかりませんでした。キャリアケースを引い  
た若い女性がいた事、少し気持ちに余裕がなさそ  
うな男性がいた事が印象的でした。

1/9には夜回りに参加しました。3人の方とお

会いできました。見た感じの印象では路上生活者  
とは分からない、普通の方たちでした。

驚いたのは、コロナの一律10万円の給付金に  
興味を示されない方がいたと聞いたことです。お  
金が欲しいというのは、みんなが当たり前と思っ  
ている気持ちだと思っていましたが、そうではな  
いという事。

1度参加しただけでは、目指すべき方向性はま  
だわかりません。一人一人の事情や考え方も違  
うので、簡単には理解できないだろうなと思っ  
ています。

過去の夜回りの報告書に「夜回りは、すぐに、  
なにか、目に見える効果のあること(中略)がで  
きなくても、何かあったときに、相談していい  
と思ってもらえるような関係をつくる活動だと思  
っています。」と書かれていました。まずはここを  
目標に、現状を知るところから勉強していきたい  
と思っています。無理なくできる範囲で、気負  
い過ぎずに。

## 1 年を振り返って

牛江 真由子



1 か月にたった 2 回の夜回りなのに、今年もほとんど参加できなかった。かと言って責められるわけでもなく、メンバーの皆さんはたまの参加でも温かく受け入れてくれるので、とてもありがたく感じている。

野宿している方のことをなんだか他人事とは思えず、何か少しでもお力になれば、と思って始めた活動だったけれど、たまーに夜回りに同行させてもらっているだけの私が誰かの役に立っているという実感は正直ない。ではなぜ、私はこの活動を続けているのか。ひとつは、自分自身がこの問題に向き合っていたいこと、もうひとつは、細々とでも活動を続けることで、私はこのテーマに問題意識を持っているんだということを表明したいからなんだと思う。普段あまり自己主張をしない私の、ささやかな抵抗である。

今回の越年越冬活動はコロナ禍で例年のような炊き出しがなく、食料品の配布しか行われなかった。食事も敷地内では不可、滞在時間も短くしなければならなかったため、いつものように参加者が温かい食事をゆっくり食べる姿や、ボランティアと談笑する姿も見ることができず、とても寂しい越年だった。食べ物をビニール袋に入れて配るだけの、なんとそっけないことか。袋の中にはいろいろな食べ物が入っているけれど、この中身をいったいどこで、どんな風に食べるのだろうと思うと、なんだか悲しい気持ちになった。いつものように温かい食事をみんなで同じ空間で食べるというこの価値に初めて気が付いた。

街中のベンチの真ん中に仕切りがついているのは、野宿している人がその上で寝られないようにするためだということを夜回りの活動の中で知った。他にも、人を排除するデザインというのがいろいろあるようだ。外のベンチに座ることがほばない私は、仕切りがついていることにも全く気が付かなかっただが、意図的にそうデザインされ

たのであれば、とても悲しいことだと思う。自分のものではないベンチを勝手に寝床にしてはいけないということなのだろうけれど、どうして外のベンチで寝る必要があるのか、そうせざるを得ない人に少し思いを馳せてみてほしいと思う。

## 夜回り準備会に参加して

南部 直樹



縁あってこの活動に参加してから 1 年ほどになります。越年の炊き出しがきっかけでこの活動を知り、ドライバーという形で参加しはじめました。野宿されている方を訪問することで、普段の生活では意識しない社会の問題を考えることができました。野宿されている方は普段接することがないだけに、偏見を持ってしまいがちです。見えていない、というだけで問題はないのだ、と勝手に思っていた自分に気づくことができました。

神戸ソーシャルブリッジとの協働プロジェクトの際、夜回り準備会(仮)は震災を機に始まったと知りました。実に 26 年経ったということになります。とはいえ私は震災を経験していません。まだ生まれてなく、報道で知るだけでした。

そこで先日、長田の街を歩きながら震災復興のプロセスを学ぶ「こうべあいウォーク 2021」を視聴しました。昨年まで鷹取駅南東の大国公園に集合して行われていたこのイベント、今年はオンライン限定開催でした。途中、機器トラブルに見舞われながらも 50 名ほどが視聴していて、中には横浜から見ている、という方もいました。

長田の街を歩きながら、被災した当時の状況を聞くことができ、大変貴重な体験でした。神戸市民でも震災当時の話をじっくり聞く機会はなかなかないものです。

この活動にも大切にしたいメッセージ、活動を続けていく価値があります。情報化、オンライン化の流れが新型コロナ収束しても変わらないのなら、より発信できると思います。これからもできることからやっていきたいと思っております。





# 夜回り準備会に参加して

前田 裕保



## 「一人じゃない」

もしもこの社会を変えることのできる術があるとするならば、それはとてつもない大きな力ではなく、嘘偽りのない一人ひとりのことを想うあたたかな心を寄せ合っていくことではないだろうか。

25年間、その小さいけれどもあたたかな想いを積み重ねながら日々、誰かの寂しさを癒してきたのだろう。

人付き合いに疲れ果てたある人が言った。

『人間に関わるのはもうしんどい。でもな、動物は裏切らない』と。

野宿先に花火を打ち込まれた誰かは言った。

『ほんの悪戯心なのだろうが、なんで俺がこんな目に遭わないといけないんだ。だれに迷惑をかけているわけでもないのに』と。

決して誰もが望んだ人生ではないだろう。

すべての人々にとって平等な社会ではない現実を知った。

でも、一人じゃない。一人の人に向けたあたたかな心がずっとそばに居つづけるから。

実際に出会って、対話して暮らしぶりを学び、現実を知ることによって価値観が大きく変わった。「誰かのことをすべて受け入れることのできる寛容な社会を目指したい」

神戸YWCA夜回り準備会(仮称)の活動に触れ、つくづくそう思うようになった。

一人ひとりへ真っ直ぐに、慈しみ、捧げ、受け入れつづけながら想いを重ねていく。溢れる想いを胸に。

また今日も、「おにぎり」「カイロ」「マスク」「あたたかなコーヒー」を持って夜回りへと出かけることから。決して一人ぼっちにさせないために。

## 神戸「冬の家」越冬越年活動

阪神淡路大震災は私たちに様々な問題を突きつけた。住まい、仕事、命の問題。26年が経過した今もなお生きがたい状況にある人々がいる。現代社会の縮図がここ神戸にもあった。

越冬越年活動会場の入り口に掲げてあった看板をみて衝撃を受けたのだ。

「人間がよりよく生きるにはどうしたらよいか」

「より心豊かに生きるにはどうしたらよいか」

気付いた者から始めよ。そう訴えられかけている気がしてならない。





# 野宿生活者の実態と支援の現状

## —神戸 YWCA 分室、夜回りの活動に参加して—

箕田 尚



### 1. 神戸 YWCA 分室の活動とは

神戸 YWCA 分室の夜回り活動とは、毎月 2 回、野宿生活をされている方々へ訪問し、何か必要なものはないか？困りごとはないか？などを訪ね、おにぎりやパン、いまの季節なら携帯カイロ、マスク、温かいコーヒーなどを提供し、また必要であれば衣類や肌着などを手渡しします。状況に応じて病院の紹介などや生活支援の紹介をされることもあります。ボランティア活動なので、各々の仕事を終えてメンバーは夜に集まります。夜回り準備会の代表が中心となって、事前ミーティングを行い、その日に必要なものを準備して、1 台の車を 3～4 人乗り合わせ、夜の 7 時から 1 時間から場所によっては 2 時間ぐらいかけて、神戸の灘区、東灘区あたりを回り、待ち合わせ場所や野宿生活されている場所を個別訪問する活動です。

### 2. 参加しようと思ったきっかけ

参加するきっかけになったのは、友人から教えていただいた「神戸冬の家」の炊き出しボランティアです。それまで私も存じ上げなかったのですが、「神戸ルミナリエ」が行われている会場の東遊園地（公園）で、阪神淡路大震災以来、年末年始にかけて、越冬越年「神戸冬の家」の炊き出しボランティアが行われていることを知り、その友人に誘われて参加することになりました。日替わりでいろいろなボランティア団体が炊き出しを行い、集まった野宿生活されている方々に温かい昼食を無償で提供するのです。ボランティアのみなさんと大きな鍋で 200～250 食ぐらいを調理します。お昼の配膳の時間になると、普段、ほとんど見かけたことのない野宿生活をされている方が、

200 人以上集まって列をつくって並んでいました。列の中には高齢の女性の方もいらっしゃいました。「こんなにも野宿者って居ているのか・・・」と正直驚きました。

そこでお手伝いをしているときに、夜回りにて野宿者支援をしている団体があることを知り、代表の方の連絡先を教えていただき、夜回り準備会の活動に参加するようになりました。

### 3. 野宿者訪問（夜回り）に関わって

夜回りに参加して、実際に野宿者支援に関わってからも驚くことがたくさんありました。公園のなかで、おそらく拾ってきたであろうマットレスを寝床にして暮らしている方や、雨露をしのぐため歩道橋の下で段ボールを敷いて寝泊まりされている方、都会の街中の片隅で、実際に暮らしているのです。

個別訪問先の対象者に、夜回り準備会の代表が近況やニーズを訊いてまいります。

その都度ニーズに合わせて、個別訪問の準備を行います。

このような人たちのために、「更正センター」や「更正援護相談所」があり、生活相談も受け入れられる施設があります。神戸 YWCA 分室のみなさんと施設見学に行ったことがあります。実際、足を運んで見てみると、間仕切りのない畳の寝室、間仕切りのない二段ベッドなど、おおよそ施設内でのプライバシーはありませんでした。支援対象者に施設のこと勧めても「あそこはいやや」と野宿者自ら断るケースも少なくないのです。

そのような野宿生活から脱却された方もいらっしゃいます。神戸冬の家炊き出しボランティア



で、配膳後に回収したお皿とコップを洗う係を私は担当していました。見知らぬ者同士で他愛のない話をしながらお皿を洗っていると、当日同じ係をしていたオッチャンが・・・「ワシな、昔はここで（配膳）もらうほうやってん」と話し始めました。聞けば野宿生活は長かったみたいですが、生活相談支援で何とかアパートを借りられるようにまでなったそうです。そのオッチャンが言うには「ここで世話になったから、恩返しで炊き出しボランティアに来てるんや」と酒焼けした笑顔でおっしゃっていました。そのオッチャンは毎年、神戸冬の家の炊き出しボランティアに参加されています。

人はそれぞれ抱えている悩みや問題などは、さまざまです。何かきっかけで、野宿生活を強いられるようになり、何かきっかけで支援される側から支援する側になる。

支援する側になったオッチャンのように、ひとりでも多くの方が、そのような機会に恵まれることを願って止みません。

#### 4. コロナ禍での野宿者支援について

2020年の3月頃から新型コロナウイルス感染拡大のため、私たちの生活様式もかなり変わってきましたし、何かと不便が強られることも（マスクの品薄など）ありましたが、野宿者生活をされている方々へは、もっとしわ寄せがあります。例えば、国からの特別給付金も、住民票がない理由で野宿生活者には10万円交付されていませんし、2020～2021 越年越冬「神戸冬の家」の炊き出しボランティアも、密になることを避け、感染拡大予防のためにテントの下での温かい食べ物の調理および配膳ができなくなりました。野宿者へは、おにぎりやカップ麺の支給のみと、大幅に規模が縮小されました。

最近、コロナ禍で職を失い、ネットカフェを渡り歩いている野宿者も多いと聞きます。

5. みなさんへの願い。「花を花と呼ぶなかれ、木を木と呼ぶなかれ。」

野宿生活者（あえてホームレスとは言いません）の話になると、どうしても「自己責任論」になります。「働く気がないから野宿生活になるのだ。まともに働かない、おまえが悪いのだ。」になってしまいがちです。

個人情報になるので、詳しくは話せませんが、野宿生活者の方々もいろいろな事情を抱え、いまの生活を余儀なくされているのです。野宿生活や病気、障害などは、誰一人として望んでなかった人はいてないのです。

神戸冬の家で亡くなった野宿者の方々の追悼集会で、お坊さんの講話でこんなくだりがありました。

**「花を花と呼ぶなかれ、木を木と呼ぶなかれ。」**

そう、私たちはどうしても総称として「ホームレスの人」と言ってしまいがちですが、個々に事情を抱え、そういった生活を余儀なくされている〇〇さん（個人名）なのです。

夜回り準備会の個別訪問では支援対象者へは「名前」でお声がけしています。置かれる立場こそ違えど、個々に〇〇さん△△さんと呼び、おたがいの人権を当たり前で尊重されていました。これは夜回りに参加して、私が一番強く感じたことです。



# 会計報告

自：2019年4月1日  
至：2020年3月31日

## 収入の部

項目	金額(円)
寄付金	276,000
助成金	70,000
合計	346,000

## 支出の部

項目	金額(円)	備考
通信費	5,699	報告書発送費
物品費	60,301	越冬炊き出し食材、パン、 下着、蚊取り線香、カイロなど
印刷製本費	46,131	報告書印刷費
支払い寄付金	30,000	神戸冬の家越冬活動協賛金
支払手数料	2,065	振込手数料
管理費	201,804	神戸YWCAへ支払
合計	346,000	

# 寄付・寄贈報告

自：2020年3月1日  
至：2021年2月28日

## 【市民からの寄付・寄贈】

東昌宏 荒井敦子 有馬京子 石川智恵子 石本賢司 稲木さん イナズマヒロユキ 井上雅人  
井上みち子 今津裕幸 岩崎茂 岩田昭子 宇土純子 梅澤昌子 オオクラヒトシ 大西利紗  
オガサワラトモコ 岡本千鶴子 岡本正行 荻野浄美 尾崎和弘 織辺里美 カタヤマユキ 加藤和子  
金子あさみ 河井さん 川飛妙子 川辺比呂子 河村紀子 北のコタン宮田洋子 木村文子 桑島勝代  
小倉寛 後藤安子 小村さん 是永康子 澤田千晶 澤田佳音 繁田啓子 重富明子 柴田幸子  
菅沼秀子 関家美津子 瀬戸昭 高橋さん 竹内秀子 立山真理 田平正子 玉岡昇治 築山智津子  
鶴崎祥子 戸田公江 戸田恵子 中川博子 中島紀子 中野住香 中道澄春 仲山由紀子 中山圭子  
中山さん 南部直樹 新明隆志 新原三恵子 西島明子 西山秀樹 二宮百合子 野々村耀  
早野美智子 半澤敦子 久本祐子 ヒライミナコ 藤枝健一 藤岡直俊 藤原昭彦 前田圭子 前田祐保  
的野綾子 水池千代子 三浦啓子 宮地京子 宮田康子 村武克子 六渡和香子 本下文子  
本山美登利 森原寄指子 安田朝美 矢野さん 山本啓一 山本千賀子 山本雅規 山本美和子  
山本容子 ユグテさん よこのみきこ 横山千春 吉田英三 吉田眞知子 吉永美奈子 米岡史之  
渡邊順子 匿名のみなさま

## 【企業・団体・組織からの寄贈】

扇町公園炊き出しの会 KDDI株式会社 コープこうべ ビッグイシュー基金

万一、漏れや間違い等がございましたら、お知らせください。

**参加者募集：**月2回（毎月第2・第4土曜日、18時～）活動しています。特にドライバーを担当いただける方、歓迎です。

**カンパ募集：**備考欄に「夜回り準備会（仮）の活動のために」と記入のうえ、下記の神戸YWCAの口座までお振込みください。

## 神戸YWCA 夜回り準備会（仮）活動報告書 vol.16

発行：神戸YWCA夜回り準備会（仮）

発行日：2021年3月31日

編集：南部直樹

今回の報告書は、「2020年度NHK歳末助け合い義援金」の助成を受けて作成しました。

## 神戸YWCA 夜回り準備会

e-mail: yomawari@kobe.ywca.or.jp

## 公益財団法人 神戸YWCA

本館 〒651-0093 神戸市中央区二宮町 1-12-10

tel. 078-231-6201 fax. 078-231-6692

e-mail: office@kobe.ywca.or.jp www.kobe.ywca.or.jp

分室 〒651-0062 神戸市中央区坂口通 5-2-16

tel. & fax. 078-221-5111 e-mail: bunshitsu@kobe.ywca.or.jp

2020年、神戸YWCA創立100周年

## YWCA

（ワイ・ダブリュー・シー・エー  
（Young Women's Christian Association）は…

キリスト教を基盤に、世界中の女性が言語や文化の壁を越えて力を合わせ、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現する国際NGOです。

郵便振替口座 01100-0-10298 公益財団法人神戸YWCA  
三井住友銀行 三宮支店 普通 1015232 公益財団法人神戸YWCA

